

## 「追悼の言葉」

本日ここに、ご来賓のご臨席を賜り、多くの遺族の参列のもとに「埼玉県戦没者追悼式」が厳肅に挙行されるにあたり、戦没者遺族を代表し、謹んで追悼の言葉を申し上げます。

先の大戦が終結し今年で八十年になります。この間、日本は廃墟と混乱の中から立ち上がり、平和で豊かな国家を築き上げてきました。しかしながら、我々が当たり前のように享受しているこの平和な日々は、望郷の思いを胸に、幾多の戦場で、祖国の安泰と家族の幸せを願いつつ散華さんげされた戦没者の尊い犠牲いけにえの上に築き上げられたものです。

また戦後の目覚ましい発展は、深い悲しみを乗り越え、幾多の困難に耐えながら、子供たちを立派に育て、家業に精励せいれいした遺族の努力無くして成し得なかったことであります。

改めて亡くなられた多くの戦没者の方々、また辛苦に耐え苦難を乗り越えてこられた遺族の方々に思いを致すと、痛惜つうせきの念ねんを禁じ得ません。

私の祖父は昭和二十年三月フィリピンのルソン島において三十三歳で戦病死いたしました。その時父はまだ七歳でした。父を

はじめとする四人の幼子を抱えた祖母の苦勞、また長男として一家を背負った父のことを思うと、二人の苦勞は並大抵ではなかったと思います。祖母は平成二十八年七月百二歳で亡くなりましたが、生前は多くのことを語らず、自分たちと同じ遺族の皆様のために、骨身を惜しまず東奔西走していた姿を覚えています。国家のためとはいえ、大切な家族を奪われた悲しみや怒り、そして二度と戦争は起こすまいという思いが原動力となっていたように思っています。

しかし世界の現状は平和とは程遠い状況にあります。多くの地で紛争や戦禍が絶えず、人びとが傷つき、命を奪われています。戦争は決して他人事ではなく、我々のすぐ隣で起きているのです。

今日国民の大半が戦後生まれとなっています。私自身、戦争を知らない世代であります。戦争体験のある方々から見れば、我々には実に心もとない存在ではないかと思えます。しかしだからこそ、再び戦争の惨禍を繰り返すことのないよう先の大戦から学んだ多くの教訓を風化させることなく次の世代に引き継いで行かなければならないとあらためて強く思うのです。

遺族会では、戦争の記憶を戦没者の子から孫・ひ孫へと継承し、次世代に語り継ぐ「平和の語り部」活動に、我々青年部も本会と共により一層力を入れて取り組んでおります。一つ一つの活動を

積み重ね、平和の礎<sup>いしずえ</sup>を作り上げていく所存です。平和を守り、未来永劫継続することは肉親を失った私達遺族の責務であり、そしてなにより英霊が願われた恒久の平和実現につながるものです。

結びに、ご英霊のご冥福とご参列皆様のご健勝とご多幸を祈念申し上げます、追悼の言葉といたします。

令和七年十月十一日

埼玉県戦没者遺族代表

一般財団法人埼玉県遺族連合会

青年部長 中野 英幸